

LHR, 肝臓の胸腔内脱出, 羊水過多, 合併奇形の有無と出生後早期の予後について検討した.

【結果】ヘルニア修復術を施行できた症例は5例で, その他は出生後早期に死亡した. 予後良好例ではLHRが有意に高値だった. 肝臓の脱出, 心構造異常は予後不良例で多く認めた.

【考察】CDH孤立症例ではLHR > 1.2の症例は予後良好であり, 一方LHR < 1.2の症例は出生後早期に死亡に至った.

【結語】CDHの早期予後予測因子の一つとしてLHRは有用である可能性があると考えられた.

II. 特別講演

「新生児外科, 母子センターの挑戦」

大阪府立母子保健総合医療センター
小児外科部長

窪田 昭 男

第240回新潟循環器談話会

日 時 平成16年9月4日(土)
午後3時~6時
会 場 新潟大学医学部
第五講義室

I. 一般演題

1 肺動脈原発平滑筋肉腫の一切除例

島田 晃治・菊地千鶴男・中山 健司
大関 一

県立新発田病院心臓血管・呼吸器外科

症例は45歳女性. 主訴は咳・血痰. CTで右肺動脈末梢から主肺動脈分岐部付近までを閉塞する病変を指摘され当科紹介入院. 術前カテでは肺高

血圧は認めず. 肺動脈原発の腫瘍を疑い, 胸骨正中切開で開胸し体外循環・心拍動下に右肺全摘術を施行. 右肺動脈は主肺動脈分岐直後で離断して切除した. 右肺動脈を閉塞し主肺動脈分岐部付近まで進展する充実性腫瘍を認め病理組織診断は平滑筋肉腫であった. 肺動脈原発の腫瘍は稀であり報告する.

2 正常収縮機能心の急性心不全による aborted sudden death 例

田村 真・坂内 省五

聖園病院循環器内科

症例は76歳女性. 左下肢の浮腫の精査を目的に入院し, その数日後, 夜七時ころ突然呼吸困難を訴え, 意識消失, 呼吸停止をきたした. 血圧は192/90mmHg, 脈拍90bpmと保たれていた. 当直医が挿管, 人工呼吸を開始した. 人工呼吸を開始後, 意識は回復した. 心電図は洞調律, 前胸部誘導で陰性Tを認めた. X-P上両肺のうっ血所見を認めた. 心筋逸脱酵素の上昇はごくわずかであった. 数日後の心エコーでは心収縮機能は正常(LV 4.0/2.1cm)であり, 軽度の求心性心肥大を認めた. 遠隔期でのBNPは高値(249.6pg/ml)を示した. 拡張能の低下による心不全が病態として考えられた. 突然死は原因検索が難しく, 収縮機能が保たれている場合は心室細動などの病態が考えられているが, 拡張機能低下に伴う急性心不全によっても突然死をきたす可能性が示唆された. 拡張機能低下の検出は難しいが, 加齢とともに増加すると考えられており, 潜在的な有病率は特に高齢者では高いと考えられ, 今後突然死の原因としても注目すべきと考える.

3 当科における高側壁枝による急性心筋梗塞の検討

樋口浩太郎・柳川 貴央・宮北 靖
大塚 英明

新潟こばり病院循環器内科

今回我々は左回旋枝中枢から左室側壁に分岐す